資料紹介

デイビッド・ドイッチマン編（渡辺邦男訳）『フィデル・カストロ20世紀最後の提言――グローバリゼーションと国際政治の現況』VIENT　2005年　403ページ

本書は，1998年から2000年までのカストロの演説からいくつかを選び，それぞれ内容を抜粋してまとめたものである。原題は「危機に瀕する資本主義」となっており，カストロが冷戦後世界中で有力となった新自由主義とグローバル化への批判を行った部分が選ばれている。本書は英訳書からの翻訳で，原書は最初にキューバ国内で，スペイン語で出版されている。

ソ連崩壊後のカストロの世界観を描き出す内容が，満遍なく取り上げられていると評価できる。かなり従属論に近いと読める途上国経済の分析，反帝国主義，キューバ革命が達成した社会開発の成果，環境問題，民族紛争など。その主張は一方的である場合もあるが，人並みはずれた記憶力を生かして縦横に数字を引用し，それなりに論理的整合性のある内容であり，政治家の演説としては一流といえよう。

彼の言説が現在も多くの人々をひきつけるのは，経済発展を遂げたアジアの一部の途上国を除き，依然として経済的困難から抜け出せない大多数の第三世界の人々の焦燥感を，彼がうまくとらえているからではないかと思われる。ただ主張するだけでなく，キューバ政府はできる範囲で救いの手を差し伸べ，巧みに国際社会の一部を味方につけている。その基礎となっているのがカストロの主張であり，この国が冷戦後の今も国際社会でその規模に似合わぬほど大きな注目を浴びるソフトパワーの源泉なのである。

本書は，とかく長くなりがちなフィデルの演説を，原文の雰囲気を損なわずに短くまとめており読みやすく，彼の考え方や思想を総合的に知りたい向きには格好の書である。

（山岡加奈子）

ブライアン・ラテル著（伊高浩昭訳）『フィデル・カストロ後のキューバ――カストロ兄弟の確執と〈ラウル政権〉の戦略』作品社　2006年　373ページ

本書は長く米国中央情報局（CIA）のキューバ分析官で，後年ジョージタウン大学の外交大学院で教鞭をとったラテルによる，カストロ兄弟を中心としたキューバ革命政権の分析である。

著者はCIA時代，常に「自分がカストロの立場だったらどういう行動をとるか」を念頭に置きながらキューバ情勢を分析したといい，本書も指導者個人の心理学的分析が中心となっている。特にこれまで類書ではあまり取り上げられてこなかったカストロ兄弟の生い立ちを詳しく取り上げ，婚外子として育ったつらい子供時代が兄弟（特にフィデル）の人格形成に暗い影を落としたという分析は興味深い。フィデルの後継者である弟ラウルについては，フィデルよりも実利主義者で周囲の意見をよく聞き，バランスのとれた指導者になると予測している。

フィデルがマルクス主義者になったのはどの時点か，という長年の論点についても，著者は冷戦後旧ソ連の資料が公開されて以来有力になった「米国との関係悪化後」説に異を唱え，革命成功前からマルクス主義者で，十代のラウルをマルクス主義者にしたのはフィデルである，という新説を掲げている。ただしフィデルがマルクス主義を取り入れた目的は，マルクス主義の理想を実現することではなく，自己が権力を握るために有用だと判断した結果であるとしている。これに関連して，彼は少年時代からアレキサンダー大王やシーザーなど古代の支配者に憧れ，大学時代はヒトラーやムソリーニの演説集を研究し，民主主義政体に関心が薄いと指摘している。

フィデル後のキューバが現実味を帯びてきた現在，非常に時宜を得た出版と思われる。本書の価値を認めて短期間に訳業を終えられた伊高氏には敬意を表したい。

（山岡加奈子）

アリエル・ドルフマン著（宮下嶺夫訳）『ピノチェト将軍の信じがたく終わりなき裁判――もうひとつの9・11を凝視する』現代企画室　2006年　238ページ

一本の電話が人の人生を変えることもある，というフレーズが思い浮かぶ。筆者はアジェンデ政権内で官房長官の非公式文化顧問であり，1971年9月11日の軍事クーデタ発生のひと月前も，行政府がおかれていたモネダ宮殿で勤務していた。その日彼のもとにかかってきた電話はピノチェト（当時陸軍将軍）からで，それを長官に取り次ぐためのわずかな会話，これが筆者とピノチェト将軍をつなぐ唯一の直接的な接触である。ピノチェトがその時すでに企んでいたであろうことを見抜けなかったことを悔い，その後の人生では自らを罰するように「ほとんど偏執的に」元将軍の人権犯罪に関するあらゆる記録をとることとなった。

本書は1998年10月から2001年7月にかけて，その時々のピノチェト裁判に関する事件をもとにした10本のエッセイで構成されている。自身が軍事政権によって亡命を余儀なくされ，また多くの友人を失った被害者でもあり，ピノチェトによる人権侵害を糾弾する，という姿勢は一貫している。しかしこれが単なる信条の主張に終わらないのは，彼が入手した各種の情報を，いずれもカットバックの手法を効果的に用いて，事実的根拠で緻密に裏打ちしながら犯罪性を明らかにし，これをもとに持論を繰り広げているためであろう。

ピノチェトの人権侵害裁判の検討を通じて，分断されたチリの社会構造や，独裁者の人権侵害を裁くことの困難さを浮き彫りにしている。一つ残念な点をあげるとすれば，本書が米国の9・11事件から5年後に合わせて刊行されたため，2006年12月10日のピノチェトの死については触れられていないことである。これについては，彼のホームページ（http://adorfman.duke.edu/）にエッセイが掲載されているので，こちらも一読を勧める。

（北野浩一）

黒田悦子・木村秀雄編，綾部恒雄監修『講座　世界の先住民族　ファースト・ピープルズの現在　08　中米・カリブ海，南米』明石書店　2007年　335ページ

本書は10巻講座の一冊で，中米・カリブ海地域（メキシコ，グアテマラ，ドミニカ国）と南米地域（チリ，アンデス，ボリビア，パラグアイ，ペルー，ブラジル，ベネズエラ）を扱っている。それぞれ，10本と7本の論文が編者による解説を付して並べられている。これらの地域の先住民の現在の姿が，時には歴史的背景とともに，文化，文化復興，指導者，運動，出稼ぎ，観光，女性等のテーマを通じて，文化人類学的視点から，多彩に分析され，描き出される。

本書を貫く社会科学一般につながるキーワードは，「現代社会での生き残り」であり，文化人類学独自のそれは「アイデンティティの維持，探求」であろう。アイデンティティが固定，確立したものでなく，既存のアイデンティティをもとに更新，創造されていくものであることがさまざまな角度から実証される。われわれにも共通する現代的な問題が語られているにもかかわらず，通読すると先住民の世界に引き込まれている不思議な感覚に陥る。例えば，冒頭のメキシコのウィチョルを扱った論文では，現代の文明（化学肥料や農薬）によって障害児の誕生の増大等，共同体に恐ろしいことが迫りつつあること，それに対する危機意識が長老たちや人々の言動の根底にあることが示唆（分析）される。しかし，記述自体は彼らの行動や彼ら自身によるその説明が中心となっていることが，読者を先住民の世界に誘うのである。

ラテンアメリカに関する文化人類学的研究の多様性とともに，根底で共通する著者たちの問題意識，研究における熟練と楽しみが感じられる，講座にふさわしい一冊である。なお，副題の「ファースト・ピープルズ」とは，先住民や先住民族を統合して表現した用語との説明がなされている。

（米村明夫）

桜井三枝子編著『グアテマラを知るための65章』明石書店　2006年　370ページ

密林のピラミッドと先住民の色鮮やかな民族衣装が旅人を惹きつける中米グアテマラ。ノーベル賞を受賞したミゲル＝アンヘル・アストゥリアス（1967年，文学賞）やリゴベルタ・メンチュウ（1992年，平和賞）の出身国としても知られている。本書はグアテマラの歴史，政治，経済，社会，芸術，文化を幅広くカバーし，今日の同国の姿を理解するのに便利な一冊である。

グアテマラ中西部高地を訪れると，人々が身にまとう鮮やかな色とさまざまなデザインをこらした衣装に目を奪われる。これらの色彩豊かな民族衣装は，「スペインとマヤの価値観が融合した，グアテマラ高地ならではのカトリック信仰」（226ページ）により受け継がれてきたものである。なかでも祭礼衣装は色鮮やかで，マヤ系の先住民女性が身につける晴れ着であるソブレウィルピルは村ごとに紋様や色使いが異なる。カバーのカラー写真からわずかながらその様子がわかる。本書はさらに，腰当てを備えた手織機（腰機）や紋様，織り，染めまで踏み込んで解説を加えている。

このような民族衣装を一見すると，この国には伝統文化や社会がよく残されているように思える。しかし20世紀後半のグアテマラは，特に先住民族を対象とした人権侵害・政治暴力が激しかったことで知られている。「表には見えない隠れた戦争」（109ページ）といわれる国内の武力紛争が，1960年から96年まで36年間も続いたのである。真相究明委員会の調査によれば，死者・行方不明者20万人以上，国内避難民150万人，国外難民15万人という大きな被害をもたらした。

1996年の政府とゲリラ・グループのグアテマラ民族革命連合による和平後も，政治・経済・社会においてさまざまな問題を抱えている。しかし，世界遺産にも登録されている中世の面影を残したアンティグア市やティカルの階段式ピラミッド神殿など，文化的には魅力にあふれている。

（清水達也）

小野瀬由一著，川上オズワルド／高崎ルイス・アントニオ監修『循環資源大国　ブラジルビジネス入門』同友館　2006年　277ページ

昨今のBRICsブームでブラジルへの注目が集まっている。BRICsという造語を世に出したのは2003年10月に発表された証券会社ゴールドマンサックスのレポートであった。40年以内にBRICsが経済規模でＧ６を追い越すというショッキングな予測によって，レポートは一躍有名となった。以降日本でも，BRICsをタイトルに冠したいわば“BRICsもの”とでもいえる単行本が数多く出版されている。これらの本に共通するのは，著者が経営コンサルタントや証券アナリスト，銀行系・証券系シンクタンクの研究者で，必ずしも長年各国を研究してきた地域研究者ではないことである。経営コンサルタントによって書かれた本書も，“BRICsもの”の一つといえよう。

本書はビジネスマンを対象に，ブラジルでビジネスを行うのに最低限必要な情報を提供することを目的に書かれている。ブラジル経済・社会・政治の概況，ブラジルでビジネスを行うのに必要な基礎知識，日本企業のブラジルビジネスの成功事例の紹介，日本とブラジルの関係史など内容は盛りだくさんである。ただしテーマの取り上げ方が広範である上，個々のテーマについて掘り下げて言及していないために，ブラジルについてある程度知識をもった読者は物足りなく感じるであろう。地域研究者である評者からみて本書が興味深いのは，これまであまりブラジルとは縁のなかった経営コンサルタントである著者がブラジルを世に知らしめようとする時に，何に着目するのかを知ることができる点である。それはとりもなおさずBRICsブーム下，日本のビジネスマンのブラジルへの関心のあり方を示すものといえる。今後，ブラジルを扱う“BRICsもの”の出版は増えると予想される。本書はその先陣を切る本と位置づけられる。

（星野妙子）